

日本福音主義神学会

中部部会報第15号

<目次>

巻頭言	山崎ランサム和彦	1 P
ルターとルター神学~その真意	橋本昭夫	2 P
アウグスティヌスの手紙	松浦 剛	9 P
日本福音主義神学会 2014 年全国研究会			
分科会 (争点) 「教理」の発題	後藤喜良	12 P



巻頭言

山崎ランサム和彦

主の御名を賛美いたします。

中部部会会報の15号をお届けいたします。昨年11月に関西聖書学院を会場として行われた全国研究会議は、約200名が参加し、盛況のうちに終了することができました。「福音主義神学、その行くべき方向—聖書信仰と福音主義神学の未来—」というタイトルに端的に表されているように、福音主義神学のアイデンティティそのものを改めて問い直そうという、非常に意欲的な問題意識が多くの方々の関心を引き起こしたものと思われま

す。会議では積義部門・教理部門・歴史実践部門に分かれ、それぞれの分野において福音主義の基盤を確認すると共に、ポストモダニズムや3.11以降の新しい時代状況をふまえ、福音主義陣営の中から起こってきた多様な動きや問題提起を紹介し、日本の福音主義の未来を展望するという内容で、活発な話し合いがなされました。非常に中身の濃い3日間のプログラムであり、個人的にも大いに刺激と啓発を受ける機会となりました。また、日本各地で日々神学的研鑽を積んでおられる多くの素晴らしい方々との出会いが与えられたのも大きな収穫でした。

中部部会からも発題者・奉仕者をはじめとして積極的に参加をさせていただき、私も積義部門で津村俊夫氏の主題講演に対する応答講演を担当させていただきました。その中で私は、従来の福音主義における聖書積義の標準的アプローチである歴史的・文法的方法の妥当性を認めつつも、それだけに限定されない多様な読み方が福音主義の中でも許されるのではないかと、新約聖書における旧約聖書の引用を手がかりとして論証しようと努めました。使徒たちはイエス・キリストと出会う体験を通して、キリストというレンズを通して旧約聖書を再解釈するようになりました。使徒たちの旧約解釈はキリスト中心的であり、それは引用元の著者である旧約記者が本来の歴史的・文脈の中で意図した意味を超える部分があるのであないか、という問題提起をさせていただきました。詳しい議論に関心のある方は学会誌『福音主義神学』45号に掲載された拙論「新約聖書における使徒的解釈学—現代福音主義への示唆—」を参照していただければ幸いです。私の主張には肯定的・否定的な様々な立場からの応答をいただきましたが、聖書の霊感理解にも関わってくるようなセンシティブな話題に対しても、冷静に理性的な議論をする場が生まれつつあるということを実感し、励ましを受けたのは事実です。

もちろん、福音主義神学のアイデンティティというのは非常に大きなテーマであり、数日間の会議で論じ尽くせるようなものでもなく、神学会としてのコンセンサスを容易に形成できるような性質のものでもないことは論を待ちません。今回の全国研究会議ではあくまでも、議論のスタートラインに立ったということであり、今後の議論の深まりは私たち福音主義者の一人ひとりの取り組みにかかっていると一言しても良いと思います。『福音主義神学』誌でも2号にわたって今回の研究会議に関連した特集を組み、各分野の論稿を掲載していくということです。

福音主義神学の全体が大きな転換期を迎えつつある今日、私たち中部部会もできるかぎりの貢献をしていきたいと願っています。今年度の春の公開講演会では、東部部会より関野祐二氏（聖契神学校校長）を講師にお迎えして、『福音』とは何かというテーマで講演していただく予定です。福音主義神学の心臓部とも言うべき、「福音」の理解を今一度問い直し、聖書に基づいて深めていくまたとない機会であると考え、心から期待しております。

今の日本社会は、いろいろな意味で先の見えない暗い時代であるとも言えるかも知れません。けれども、福音主義神学の世界においては、新しい時代が幕を開けつつあります。これからの時代は神学をするにはとても良い時代であると思います。しかし、新時代の福音主義神学はまだその姿をおぼろげにしか見せていません。それを作り上げていくのは、今の時代に生かされている私たち一人ひとりです。中部部会会員の皆様も、ぜひ積極的に神学会の活動に参加していただければ幸いです。

（中部部会理事長）

ルターとルター神学～その真意

橋本昭夫

昨年、中部々会の総会に何年かぶりでお招きをいただき、学びの交わりをもたせていただいたこと、うれしく心から感謝しています。以下のものは、そのときに講演したものと幾分異なりますが、ご依頼のテーマに沿うものとして寄稿させていただきたいと思えます。

1. ルターのキャリア概観

ルターは、1483年11月10日、ドイツ中東部のアイスレーベンという町に生まれています。父は小事業家で、鉱山事業で成功したハンス、母は深い中世的信仰をもったマルガレーテ・チーグラーでした。誕生の翌日、洗礼を受けその日の聖人の名にちなんでマルティンと名付けられました。1484年5月、ルター家はマンズフェルトに移住しています。マルティンは、1488年マンズフェルトのラテン語学校に入学します。父ハンスは、息子が将来(教会)法律家となることを望み、彼に高等教育の道を用意します。そして1497年、マグデブルクのラテン語学校にと進んでいきます。

マグデブルクのラテン語学校在学中に、「共同生活兄弟団」という敬虔な信徒グループの冥想と活発な愛の活動という信仰の息吹に触れます。中世後期の敬虔の最上のもをルターはこの時期に吸収しますが、しかし彼の内面にあったのは審判者として神への責務と恐れでした。1501～1505年、父の願いに沿い法学士となるべくエルフルト大学に進みます。そこで彼は、人文学的修練を受ける中、また強烈な知識欲に燃え、さらに音楽にも興じることのできる学生でした。しかし同時に、内面に真摯な恐れと憂鬱をたたえる青年でした。

1505年7月2日、休暇から学校に戻る道すがら、シュットテルンハイムというところで落雷の危機に遭遇し、修道院に入る誓願を立てます(「聖アンナよ、助けてください、私は修道士になります!」)。父はそれに反対します。しかし、ほどなくルターは、それを押し、また自らも内に若干の疑いをもちつつも、その誓願にとどまり、同じ年の7月17日に、修道の歩みのもっともきびしいとされたアウグスティヌス隠修会に入ります。そして修道院の上司に対する完全な服従のもと、やがて司祭となり神学者となっていきます。

当時、救いを求める真摯な魂が、修道士になるのは決して特異なものではなく、教会はより確かな救いの道を望む者にこの道を勧告していました。ルターは、教会および修道院が提示する救いの道を、額面通り、徹底して歩もうとしました(「もし人が修道によって救いに至ることができるなら、私はいの一番に救われたであろうと」後年述懐するほどでした)。しかし、懸命な努力にもかかわらず彼の心には救いの確信は与えられず、むしろ神の審判のみが強烈に彼の心に切迫するのみでした。そんな魂の苦闘の中、聖書に熱心に取り組み、そしてついにこれまで教会の歴史の中で埋もれ続けてきた福音を再発見します(「神の義の意は、神が罪人から求められる義ではなく、神が罪人に与える義である!」)。

修道院の長であり、ルターの宗教改革的発見の助けともなったヨハン・フォン・シュタウピッツによって、彼を新しく創設されたヴィッテンベルグの大学の教授に推挙します。一度はエルフルトの修道院に戻るものの、1512年に再び同大学での働きに就き、終生その位置にありました(その間の1510年に、ルターは「永遠の都」ローマを訪れていますが、そこでの霊的・道徳的頹落を見、教会に対して深い疑念をいただきます)。

その後、彼は神学者としての独自の道を辿ります。スコラ神学（「信仰と理性の調和」を求めた中世の神学的いとなみですが）の中から生まれた「ノミナリズム」という哲学の流れのもと神学の学びを進めていきます。この哲学的伝統は、神の能動的な主権を認めるものです。彼はまたアウグスティヌスを学ぶようになります。そんな過程の中で、聖書そのものを学んでいく道へと導かれます。ヴィッテンベルク大学教授としての働きの中心は、聖書講義でした。とくに深い影響を受けたのはアウグスティヌスの「恩恵の神学」でした。多くの霊的なたたかいを経験しつつ、彼の信仰的認識は深められ確かなものとなっていきます。

1515年頃までには、彼の福音的神学の核となる部分は確立していたと言われます。彼は、やがてそれを「十字架の神学」と呼ぶようになります。なぜならキリストの十字架のもとにおいてのみ救いがあり、また現実の一切の重圧——不条理、矛盾、虚無、苦難——に抗してなお神を神として信頼し、神の筆舌を超える神の恵みを体験する信仰の可能性があると洞察したからでした。「逆の相のもと」、つまり人間的期待の対極にこそ神の恩恵が見出されると彼は認識するようになります。この関連においてルターはドイツ神秘主義という信仰的伝統からも深い影響を受けていますが、ルターの神学は神秘主義的傾向と同じ軌道上のものではありませんでした。神と人間の絶対的な質的相違、神への類いまれな恐れが、神秘主義の流れと一線を画する方向へとルターの神学を導いたと思います。

1517年、全聖徒記念の日の宵、『95ヶ条の提題』をスコラ神学の形式に沿ってヴィッテンベルクの城教会の扉に掲示します。贖宥券（いわゆる免罪符）について、なんら他の意図のない、純粹に神学的な観点から、それについて討議しようという提案でした。提題は、それまで一般的となっていた活版印刷によってプリントされ、リプリントされ、まるで燎原の火のようにドイツ全土に広がっていきます。提題は、純粹に学問的な性格でしたが、それははからずも時の世俗的諸事情の必要に答えたと解されます（「宗教改革」という歴史的事象は、政治的、民族的、文化史的動機がさまざまに働いていましたが、ルターの提題の意図するところは純粹に信仰的な事柄でした）。

ルターは、この提題の城教会の扉に掲示することが、宗教改革とよばれるに至る大きな歴史的運動が起こるとは夢にも思っていませんでした（彼は、当初、教皇レオ10世が、自分の神学的立場を教皇が擁護してくれるに違いないと信じていました！）。しかし提題は、神学的にカトリック伝来の信仰の中心部を揺るがすものでした。つまり教会がそれでもって人々の心を支配していた告解の「礼典」の根幹に触れるものだったからです。その翌年、彼は『ハイデルベルグ提題』（「十字架に神[の栄光]を見る神学こそ、本当の神学である」）を公にする機会にめぐまれ、そこにおいて十字架の神学の基本的主張を明らかにしています。その頃から、ルターはあの『95ヶ条の提題』によって異端尋問の対象となっていきます。そんな中、彼は、ローマに喚問されるはずでしたが、1521年4月、彼の領主であるフリードリッヒ（「賢侯」と呼ばれます）の主張によって、ドイツ（ヴォルムス）の国会で審問される運びとなります（有名な「我にここに立つ」と宣言したと伝えられる国会です）。このこと背景の事情ですが、1518年、ルターは枢機卿カヤタンの尋問によって異端の教を説く者と宣言されます。おりしも、時の神聖ローマ帝国・皇帝マクシミリアンが1519年1月逝去、教皇レオ10世はスペインのカールが新たな皇帝として選ばれることを阻止しようとして、フリードリッヒ賢侯を対抗候補として立てる必要を認識します。彼は、フリードリッヒの好意を得ようとして、ルターをドイツで尋問するようという彼の案に妥協します（結果的にはカールが皇帝として同年7月に選出されるのですが）。その過程で、ルターは、教皇庁および教皇制度が、「反キリスト」であ

るとの認識に抱くようになります。さらに、その後にもたれるライブティヒ討論において教皇のみならず(教皇庁混乱の15世紀にそれを是正するために制度として設けられた)「公会議」の無謬性も否定するにいたります。そしてついに、聖書のみが真理に至る道であり、しかもその道はすべての信徒に開かれているとしました。

話が少し前後します。1520年のクリスマス直前、ルターは教皇の破門状と「教会法典」を焼き捨てました。それにより彼は、自分が逆にローマ教会を破門するということを意識していました。前述のように、1521年4月、彼はヴォルムスの国会に召喚され、「われここに立つ」宣言(したと言われるそ)のあと、フリードリヒはルターをもはや合法的には保護できぬことを洞察、直後に彼をワルトブルグ城に匿う策に出ます。ルターは、そこでの幽閉の間、ルターは新約聖書の翻訳を4ヶ月という短期間のうちに完成します(ちなみに1534年の旧約の完成と合わせ、「ルター聖書」として、ドイツ語圏はもとより、周辺諸国にも大きな言語的文化的影響を及ぼすモニュメントを打ち立てるようになります)。その間、これまで大学の同僚であったカールシュタットがヴィッテンベルクで急激な改革運動に乗りだし、市を混乱に陥れていたため、ワルトブルク城から急拠ヴィッテンベルクもどります。フリードリヒはそれを禁じたにも拘わらずです(彼がその際に認めた書簡の一節:「最も強い信仰を持つものこそ、最も強力な保護者である」、賢侯がルターを守護するのではなく逆にルターが賢侯を守るとの確信の表明)。

宗教改革運動が契機となって政治的・社会的運動も起ります。1525年、急進的な信仰的確信をもっていたトーマス・ミュンツァーに率いられた農民は一斉に蜂起します。農民戦争と呼ばれます。信仰的信念と社会改革熱気が重なり、革命的運動に展開するようになります。ルターは、農民の要求の妥当性を認めていましたが、福音の名による農民蜂起には反対しました。彼の体をはって領主と農民の間の調停をしますが、その努力も奏功せず、無政府状態になることを恐れて、結局、領主たちに農民の蜂起を武力で鎮圧することを要求しました。その結果、農民たちには悲惨な結果を招来することになりました。ルターは「勝利者」の領主たちに、農民への報復には自制を要求しますが、それもまた功を奏せず、その結果、ルターに対する民衆の支持は急激に後退していきます。

ちなみにですが、この農民蜂起の年、ルター、かつて修道女であったカタリナ・フォン・ボラと結婚します。福音的教会の牧師のモデルとなるためでした。カタリナは、ルターの宗教改革者としてその後の働きの最良の協力者となります。

他方、農民蜂起の前年(1524年)、当時随一の人文学者であったロツテルダムのエラスムスは、彼はルターに同調していないという立場を明らかにせよとの周囲の圧力から、救いにおける人間の「自由意志」についてルターと神学的討論の開始を余儀なくされます(『自由意志について』)。ルターそれに対して1525年、彼自身の評価による最上の著作である『奴隷意志論』を著わします(この著に、彼の深遠な神経験が表現されていて、神はこの世の現実の背後にあってすべてを働く圧倒的存在であり、人間の理性で神の秘儀を計測することはできない、しかしこの窮めがたい現実の中から神はそのとてつもない恵みを示し給う、十字架上の御子がその現われ、「その信仰はこの世の現実の謎を解きはしない、しかし合理的にそれを解決しさろうとせず、その現実を勇敢に担っていくことを得させる」)。

この時にルターはいわゆる人文主義者と、同時にいわゆる「天来の予言者たち」の代表する心霊的・急進派改革者とも明確な一線を画するようになります。また次第に福音的教会の組織

が必要であると自覚され、礼拝式文、賛美歌、教理問答書などが整えられていきます。

その後、1530年のアウグスブルク信仰告白書の提示の背後での活動、カトリック教会の対抗宗教改革、福音的教理をめぐるプロテスタント陣営内の調整に向かう神学論争などが起ってきます。そんな過程の中、ルターは、1546年2月18日、牧会の働きの帰途、生まれた町アイスレーベンでその波乱の生涯を閉じます。

2. ルターの自己理解

いかに強大なスケールをもつ人物であっても、ルターも生身の人間であり、歴史的制約のもとにある存在であったということは言うまでもありません。逆に言えばそうであったからこそ、かえって彼自身の時代を超えて不断の歴史的意義を持ちつづけることができたとも言えます。たしかにルターは、常識を超えた存在でした。彼は精神的に異常の域に接するのではないかと判断されることすら稀ではありません。極度の攻撃性とたぐい稀な繊細さ、大胆かつ幼子のような信仰と周到な神学論議、単純さと実際の知恵、いわば常識的には両極端と思われる資質がルター的人格の中に同居しています。ルターは、彼の神学と類比的に、多重であり多層です。その意味でルターという人物の全的肯定も全的否定も、彼の評価としては当を得たとは言えません。現実のルターは、安易に祭り上げることも、また一蹴することも許さぬ人格的リアリティであることだけはまちがいありません。そして、彼の神学を理解し、それを評価するためには彼自身の実存、人となりを知ることが重要です。

さてルターは自分自身をどのように理解していたのでしょうか。特徴的なことは彼にはそれにおいてもきわめて自由でとらわれていないということです。自画自賛的な自己讃美でもなければ、わざとらしい謙遜を装おうのでもない。彼は自分がローマ教会を向こうに回して福音のためにたたかうという歩みをしたのですが（彼はそれを私的なこととしてではなく、公の任務として理解していました）、彼は終生このキャリアを外から「押しつけられた」ものと感じていました。宗教改革者としての歩みは神からの強制であって、その召命は彼自身のもつ才能や力量によるのではないと認識していました。それは、多くの旧約の預言者（たとえばエレミヤ）と軌を一にする自己認識であり召命経験であったと言えます。人は神の歴史の中で、それ自身においては固有の意味を持ち得ず、神の恩恵によって外から与えられるものと言えます。したがって、宗教改革という当時欧州の未曾有の意味をもつ歴史的出来事も、彼を中心とするできごとではないという理解でした。彼は1519年10月3日のシュタウピッツ宛の手紙の中で、「神がそうお望みになるなら何人ものマルティンを起こし給うことができます」と書き送っているとおりで。

1521年～22年にかけてルターはワルトブルグの城に匿われてときの主張ですが、注目すべき発言があります：「まずお願いしたいことであるが、なにびとも私の名前を引き合いに出さないようにして欲しい。彼ら自分たちをクリスチャンと呼ぶべきで、ルター主義者などと呼ぶのはもってのほかである。ルターは何ものであるというのか。福音の教えは決して私のものではない。また誰のためにも十字架につけられたわけではない。聖パウロは、コリント前書で、パウロにつく、あるいはペテロにつく、ということに許さず、キリストにつくというべきであると命じた。ましていわんや、私など——あわれな蛆虫にすぎないこの私など——、どうしてキリストの者たちを私のみじめな名前と呼ぶことが許されよう。友よ、すべて分派的呼称をやめ、すべてクリスチャンと互いを呼ぶことにしようではないか。教皇のやからは、分派的呼称で自らを呼んでいる。それは彼らにとって相応しいことである。なぜならキリストの教えに満

足せず、同時に教皇派であることを欲しており、彼らの頭は教皇であるからだ。わたしは誰の師でもないし、そうあろうとも思わない、むしろ共同の教会とともに、唯一の共同の教会の教え、キリストご自身の教えに固執する。なぜなら彼こそが私たち師であるから」。

ルターはその宗教改革的働きの基本的動機となっていたのは、彼が課せられたと自覚していた任務にたいする忠実さでした。聖書学を教授する教会の博士として聖書の「教え」に忠実であること、ここから彼は一歩たりとも動くことができなかつたのです。彼はつぎのように述懐しています：「私はこの[聖書学の]任務に召され、博士となるよう強制された。それは私の発意によるのではなかつた。ただ服従からであつたのだ。私はこのようにして博士としての職責を引き受け、私の最愛の聖書にたいし、その教えを忠実に純粹に教えることを誓つた。私がこのつとめに励んでいるその過程で、教皇が私の道をさえぎり、その任務の遂行を阻もうとしたのである。彼らがどのように悪どい方法をとつたかは周知の事実であり、さらに悪どさを深めているのである。しかし彼らは私のつとめを阻むことはできないであろう。神の名によって私は獅子も驚も踏みつけ、若い獅子も竜も私の足の下におくであろう」と。宗教改革の進展の過程において、いわゆる「聖書のみ」で行かず、その「聖書のみ」を神学的に論じていかねばならない必要が当然生じて来て、実際に細目にわたる神学が形成されていきますが、それでもルターは基本的には聖書の真理を明らかにするために働く以外にないということを常に自覚していました：「私がしてきたのはただ聖書を教え、説教し、解釈することのみであり、それが私の神よりのつとめであつた」と言っています。このようにルターは自分の神より与えられたつとめに忠実であろうとし、その結果、彼は宗教改革の中心に立つようになったということになります。

3. ルターにおける信仰義認—宗教改革の真意

ルターは『シュマルカルド信条』で、義認の教理についてつぎのように言っています：「この個条（イエス・キリストの贖いを信じる信仰だけがわれわれを義とする）については、たとえ天地が、あるいは過ぎ行くべき何ものが滅び去つたとしても、少しも妥協したり譲歩したりすることはできない・・・そしてこの個条に、われわれが教皇や悪魔、この世に反対して教え、また行っているすべての事柄がかかっている。それゆえわれわれはこれを固く確信し、疑つてはならない。そうでないならすべてのことは失われ、教皇と悪魔、そしてわれわれに逆らうすべての者が勝ちを占め、正しいとされることになるだろう」と。のちに義認の教理は、「教会がそれによって立ちもし倒れもする条項」と呼ばれるようになります。教会がそれなくしては教会ではありえないような、枢要な教理、いわば公理的な教理として受け止められています。

私たちはここで少し立ち入つてもう一度、義認の教理、ルター的な義認理解を考察してみたいと思います。義認とは、現実には「罪の赦し」です。ルターの神学においてはこの「義認」と「罪の赦し」は一つです。「死をもってわれわれの罪をあがなつてくださったキリストのゆえに罪がゆるされることを信じる時、信仰をとおしキリストのゆえに無償で義とされる」とアウグスブルグ信仰告白書において告白されています。ルター神学にあつては、義認は決して「救いの過程」における一段階ではなく、救いそのものであり、すべてはこの義認という包括的な救済理解の中で考えられています。人間が信仰によって神に義とされるということが救いであるということは、人間が神と正しい、本来的な関係に引き入れられ、それにとどまると言うことを意味します。罪人が義と認められるということは、実は神と人間の本来的関係の回復を表現しているのです。そして救いとは、人が神との正しい関係に回復されることに他なりません。

ルターにあっては、義認とは、祝福のすべてがそこから流れ出る母胎であり、すでに救いなのです。そこから人は安んじて神の祝福の一切を期待できる救いそのものです。そうであるからこそ、神によって義とされたことを知ったルターは、まさにそのとき天国に入れられたと告白することができたのです。従ってルター神学にあっては、義認は決してあるなにもものかの前段階的な事柄として理解されていません。そうではなく、そこから救われたということのすべての実が、流れ出る泉として理解されているのです。

ここで、よく問題になる義認と聖化の関係に少し触れておきたいと思います。このことを考えるときに、私たちは義認と聖化をどう理解するかが課題となります。義認は狭い意味での罪の赦しにつけるものではない。赦されたあと、以前のままなんら変わることなく罪にとどまるような性格のものではありません。「義認だけでは不十分、聖化がともなわなければ・・・」と言われるようなものではありません。そして、他方、「聖化」どのように理解すべきでしょうか。二つの方向で考えられます。ひとつは個人の信仰的人格の完成という方向。信仰者の霊的・倫理的 inner が聖められるという面に重点をおいて考える方向です。もう一つは、信仰者が自己を問うことなく、自己を忘れて愛の行為に押し出されるようになるという面で聖化を考える方向です。ルターは、前者の意味での聖化の追求は否定していると言ってよいでしょう。しかし後者の意味での聖化、つまり聖化を、人間を自分へのとらわれから開放、主なる神に、そして人に赴かしめる神の霊の働きと理解します。

ルターによりますと、「信仰は行為となって具体化せずにはおかない、人間の魂がキリストの命によって生かされる時、人間が神によって真実に義とされる時、その神との人格関係は神の性質にあずかった行為として外に現われずにはおかない。3+7はおのずから10となるように」と。つまり、「信仰はおのずから・必然的に実を結ぶ」とも。ルターによれば、信仰は真実の意味においてよき業の源なのです。この点についてルター自身の言葉が、その「ローマ人への手紙の序言」という文書にあります：「信仰は、ある人がそう考えているような人間的な思いこみや夢ではない。そのように考える人は、信仰、信仰と多くは聞いても、そこからなんら道徳生活の向上や善き業がともなわないことを見るとき、誤謬に陥り、信仰だけでは足りない、もし救われたいと思うなら善き業に励まねばならないと言う。彼らは福音を聞いても自分の思いの赴くまま考えをこらし、私は信じるという。しかしそのような信仰は、人間の底いも知られぬ心の編み出したものであるから、何の力もないし、生活の向上ももたらさない。信仰は私たちの内における神のみわざであり、私たちを変え、新たに神より生まれさせ、古いアダムを殺す。そして心も、思いも、精神も、その他のすべての力の面において、私たちを全く新しくする。ああ、信仰は、生きていて疲れることなく、力強く働くものである。それゆえ信仰にとって善き業をせずにいることは不可能である。」と。ルターは義認と聖化をふたつの過程としてではなく、一つの事実、不可分の事実であると理解しました。その背後にこのような動的な義認理解、信仰理解がありました。信仰と行為、義認と聖化は、信仰者の現実においては不可分です。その意味では、信仰者の実存に変化をもたらさぬ信仰と言うのは形容矛盾であるというのがルター的観点です。ただ信じるというだけのものではなく、人間の真実を尽くしての神への信仰で有り、信頼です。義認と聖化の関係がこのようなものなのですが、それを踏まえた上で、ルターがなお「信仰のみ」を主張したのは、「救われる」ということから一切の人間の資質やわざを除外したのは、ひとえに救済はキリストにある神の一方的な恵みによるのだという、福音の根本的認識に基づくものでした。

ルター的宗教改革において、義認とは包括的な救済でした。そして罪人の実存において、それは罪の赦しということと重なりあうことも認識しました。義認とは究極的にはキリストが私

の義となつてくださることであり、私の存在の義はキリストご自身なのです。ルターは義認において何を考えていたかと言えば、キリストを考えていました。キリストご自身以外に私たちの義はありえない。私たちにはキリスト以外、しかも十字架につけられたキリスト以外に義はありえないのであり、このお方以外に誇りはありえないのです。キリストご自身が、私と異なる存在でありつつ、私自身になってくださったということなのです。「キリストは神に立てられて、私たちの知恵となり義と聖とあがないになられた」（第一コリント 1:30）という使徒パウロの言葉はこの意味に理解されます。義認は、罪人にとって、キリストとの「幸いな交換」であると告白されるのです。そしてキリストは、罪人のうちにあつて無為でいたまわらない、ご自身に化しめたまわずにはおかない、というのがルターの義認理解なのです。

ルターと宗教改革というとき、それは「恵みにより、信仰より、義とされる。と」ということこそがその真意でした。そこにこそ、多くの「教会改革運動」と呼ばれるものとはっきり区別される境界線があります。2017年、宗教改革記念の500周年を迎えますが、教会がこの信仰によってのみ、世々にわたって存続することが、いま一度あらたに思わせられます。

(近畿福音ルーテル教会・宝塚ルーテル教会牧師)

アウグスティヌスの手紙

松浦 剛

アウレリウス・アウグスティヌス（354—430）の著作を集中的に読むようになったのは2012年以降である。教文館から刊行されている「アウグスティヌス著作集」は1979年から読者への供給が始まり、現在別巻2冊も加えると33冊が刊行されている。未刊分は3冊の詩篇講解のみとなった。私はこれらの著作を暇にまかせて読んできた。2013年2月に別巻I、同年4月にIIが刊行された。共に書簡集である。合計100通の手紙が収録されている。興味深い手紙がいくつかあり、ついつい引き込まれるようにして読んでしまった。その中の3通か4通を紹介したい。

ディオスコルス宛

アウグスティヌスが西ローマ帝国内のキリスト教会の司教であった時、ヒッポの徒のもとにギリシャ人でアフリカに勉学に来ていたディオスコルスの手紙が届いた。410年のことであった。手紙といっても長文で、ひと通り読むだけでも骨が折れるものであった。発信人は、自分がキケロの「対話論」に関して人から質問されたなら、まだ十分に読みこなすまでになっていないから、愚かさなどのボロを出さずに対応する「話しぶり」を教示して欲しいことが求められていた。

アウグスティヌスは、ディオスコルスに5章にわたる返信を送った。教会の司教として次々に用事がある私に、簡単には返事ができないようなむずかしい問いをしてきたことに不満の声を記す。その上で次のように書き送った。

貴兄の願望は無益で、空虚で、まことに子どもっぽい所がある。キケロの「対話論」のギリシャ語の原典は難解であって、哲学の専門家であったとしてもギリシャ語の表現の機微を読み分ける質問者に回答することは困難である。貴兄がキケロの哲学の全部を知っていないからといって恥じることはない。むしろ、キリスト教信仰の健全な真理さえ明確に把握しているなら、それでよいのではないか。幸いな生活は最高善によって成り立っていく。最高善が創造者である神の知恵の中に見出すことができる。それゆえに創造者である神に拠り頼んで生きれば、魂は幸いな状態に保たれる。

そこに至ったアウグスティヌスは、プラトン主義、ストア派、エピクロス派の幸福論を伝え、さらに、キリスト教信仰に一人ひとりに提供されている道を全面的に受け入れように勧めて、次のように諭す。

「わたしのディオスコルスよ。敬虔な心のすべてを傾けてあなたが彼に服従するように。また真理に向かって進み、真理を獲得するために、わたしたちの弱い歩みを神のように見たもうお方によって建設された道とは別の道を作ったりしないように、わたしは願っています。だがあなたが採るべき第一の道は謙虚であり、第二の道も謙虚であって、第三の道も謙虚です。またあなたが質問するたびに、わたしはこのように言いたいのです。語られるべき他の戒めがないのではありません。しかしながら、もし謙虚がわたしたちの善行のすべてに先行し、同伴し、追跡しないならば、またそれを見つめるように置かれ、それに寄りすぎるように添えられ、抑制されるように課されていないなら、傲慢が何かの善行を喜んでいるわたしたちの手からすべてを強奪してしまいます。」（「アウグスティヌス著作集」別巻I、343ページ）と。

コンセンティウス宛

スペインの東岸方面にあるバレアレス諸島に生まれ育ったコンセンティウスは、410年に司教アウグスティヌスに宛てて手紙を書いている。それは、司教アウグスティヌスが心理学的哲学的に三位一体論を展開していることと、教会会議が開催されて、アウグスティヌスの主張する線に添って当時の教会が三位一体論を承認可決したことに、コンセンティウスは受け入れられないで、ひどく思い悩んだ。自分の思いを押さえることができないため、ペンを取ってアウグスティヌス宛ての手紙を出したのであった。アウグスティヌスはコンセンティウスに宛てて4章におよぶ長文の返事を送った。

「最愛の兄弟にしてキリストの心でもって尊敬すべきコンセンティウスにアウグスティヌスが主にあって挨拶を送る。あなたの書物の中でわたしはあなたの才能を見てたいへん喜びましたので、あなたがわたしたちのところにお出で下さるようお願いしました。そこでわたしが願ったことは、あなたにとって必要と思われる、わたしたちの幾つかの小さな論文を、わたしたちから離れたところに居られてではなく、むしろわたしたちがいるところで読んでいただきたいということです」という具合に書き始める。すなわち膝を交えて親密に話し合いたいとの気持ちを表明している。

そこで、信仰の真理を学問的に理解する試みの正当性について、ストレートに説いていく。この手紙の受取人であるコンセンティウスに対して、信仰と理性の課題をまじめに扱うようにと勧める。救いについては信仰が理性に先行することを説明する。だが、理性だけでは解明し切れない神秘もある。理性は理解へと導き、信仰は理解に至るようにと備えさせる。だから信仰者は、現在は信じることができるものを見ようと期待すべきだと主張する。

アウグスティヌスは、目に見える事物は3種類あるという。①物体的事物であって、この天とこの地、また天地において身体的感覚が知ったり触れたりするすべてのもの。②物体的なものに似た存在をいう。それはたとえば霊の構想力によって考えられたもののように、想像されるもの。私たちが直接に見る物体のように想起されるものであれ、忘却したものであれ、思考された対象として表象されるもの。③以上の①②とも相違して精神によって理解され認識される知恵のように、物体でもないし、物体との類似性をもっていない。また、この知恵の光によってこれらすべては正しく判断される（「著作集」別巻I、366-367ページ）。

三位一体は③に属するのだから、コンセンティウスに一にして三である神を信仰し、三位一体について考えるときに思い浮かぶ像をすべて精神から追い払うことを勧めている。

ピニアヌスの義母アルビナ宛

411年のこと、ピニアヌスの義母アルビナに手紙を出している。アウグスティヌスはピニアヌスがヒッポを訪問していた時に生じたことがらを、彼の義母アルビナに説明した。すなわち、この富裕の寡婦が懐いた嫌疑を晴らそうと試みた。嫌疑というのは、他でもなくヒッポの人たちと司教がピニアヌスをヒッポに留めておこうとしたというのであった。

ヒッポの司教であるアウグスティヌスが、人々の求めに逆らってピニアヌスがその意に反して司祭に任命されることを拒否したことを説明している。ピニアヌスは司祭に任命されたとしても、もし必要になったならばヒッポを去ることができることを希望したが、それは排除された。それでもピニアヌスは誓願書にサインしたが、メラニアは他の人たちの署名に反対した。

アウグスティヌスは、ピニアヌスがヒッポに留まる旨を誓ったこと、また、アウグスティヌスがピニアヌスから誓願を強要したのではないことをアルビナに確認している。ヒッポの人々はアルビナの保有しているお金に対する貪欲から行動したのではなかった。アルビナはヒッポにおいて教会に仕える司祭たちと司教アウグスティヌスに向かって告発をしたのであったが、アウグスティヌスはお金に目がくらんでいないことを神に誓っている。ピニアヌスがまとまった献金を捧げたことは事実であるが、教会会計というのは神および教会に仕えるため

に正しく管理されていることも記している。その上で、アルピナが告発した告発を取り下げることをこまやかな心で勧めている。

当時、ペラギウス派の指導者たちは急進的な改革を志向するあまり、信者やその関係者が遺産相続した時などは、それらのお金には関与しないであることを主張していた。それに対してアウグスティヌスは、遺産相続にも神の導きと顧みがあることを信じて、教会とか修道院に寄進して、神のわざに奉仕することは正しいことと判断していた。その時に、財をどう使用すべきなのかは、信徒の人格と心がどういう状態であるのかを神は問われると考えた。

富裕なローマ人寡婦プロバ宛

411年にアウグスティヌスはプロバに、16章におよぶ長文の手紙を書いた。プロバは富裕なローマ人セクトゥス・ペトロニウス・プロウブスの寡婦であり、義理の娘ユリアナと有名になった孫娘のデメトリアスを伴って、アラリックによってローマが攻略される前にアフリカに移住していた。

ピニアヌスの義母アルピナへの手紙においても扱われていた通り、大金持ちには保有する財産の処分が大問題となっていた。ところで、富裕なローマ人の寡婦プロバは、アウグスティヌスに何を問うてきたのだろうか。課題は祈りであった。裕福な人は生活のことで憂えることはない。教会では、どなたに対しても祈ることを勧めている。プロバは、いったいどのようなことを祈ったらよいのかと、まじめに司教アウグスティヌスに問うてきた。

アウグスティヌスは記している。自分の欲する通りに生きる人たちは幸いではない。元来信徒は幸福な生活をさせてくださいと祈るべきである。食べ物や衣類を与えてくださいという祈りだけが祈りではない。そういう論法で祈りの生活がどのような心豊かな世界を見させるかを、主の祈りの心、「わたしたちはどう祈るべきかを知りません」（ローマ人への手紙8章26節）という方面に言及していく。

16章の最後まで読む時に、慰めや励ましがあまりにも多くて、満たされた心境に導かれていく。アウグスティヌスという人は、文筆家として、神の器としてずばぬけた賜物のある人であることに、どなたも気付くことであろう。

付 記

私は、2010～2012年は各年とも500通の手紙を書いた。2013年は600通、2014年は700通書いている。他の牧師と比べて手紙執筆が多いのか少ないのかは知らない。また、私が出す手紙の価値はあるのかどうかは自分で判断できない。時として、喜んで返事をくださることがある。が、返事がいただけないケースの方が多いように思う。返事を書く前に次の手紙を受け取り、返事が書けない重い心になることもあると聞く。そうならば手紙は出さない方がよいことになる。

しかし、アウグスティヌスの100通の手紙を通読してみて、1700年の時を越えて読者の心に大きな恵みが届く。まるで宝のような気がしてならない。1年に私が700通の手紙を書いたということは、1日に2通の手紙を書いたことになる。その多くは、読後にゴミ箱に捨てられていることであろう。しかし、何通かは保存されて、私の召天後に記念会などで読まれるかもしれない。暇な牧師もあるものだ。くだらない手紙を書いたものだと思われるかもしれない。だが、アウグスティヌスの手紙の場合のように、普通妥当な手紙として人の心をとらえることになるかもしれない。結果がどうなるかは、天国へ行ってからの楽しみにしたい。

(日本イエス・キリスト教団名古屋教会牧師)

日本福音主義神学会 2014年全国研究会議 分科会(争点)「教理」の発題

後藤喜良

私は、いわゆる「聖書信仰」に立ついわゆる「福音派」の教会の、しかも定年退職して、今はリサイクル(再利用)牧師として、無牧の教会で賞味期限付きの奉仕をしている一牧師の視点から発題させていただきます。私の神学は、用語も含めて「牧師の神学」あるいは「現場の神学」で、「神学者の神学」や「神学会の神学」ではありませんので、この発題は日本福音主義神学会の神学研究会議には相応しくないかもしれませんが、栄光の主と主の教会のために、40年間一生懸命に戦ってきた小さい者の証しとして聞いて頂きたいと思います。

私は今回、45年前、三位一体の神が小さい者に啓示して(再発見させて)くださった、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」(ローマ8:28-30)を宣べ伝える機会が与えられたことを、教会の主の摂理的な導きとして、心から感謝しております。

第1章 聖書の福音の再確認

今私たち、聖書信仰に立つ福音主義教会が第一にすべきことは、「聖書の福音の再確認」であると、私は確信しています。

A. 「どの時代にも福音である福音」

1. 「それぞれの時代の福音」?

ルターによる「信仰義認の福音」の再確認が、教会と世界にもたらした祝福は、500年前の福音主義教会一ドイツでは、プロテスタントという名称は殆ど用いられず、神学的にリベラルな牧師の多い国教会も「福音主義教会」と呼ばれています—が考えていたよりはるかに豊かで大きかったということは、今日の福音主義者の誰もが認めることでしょう。しかし、3.11を経験した福音主義教会にとって「福音の再発見」が必要であると指摘される「教理」部門の発題講演者は、「ルターの福音」に取って代る「21世紀の福音」を再確認して、新しい宗教改革を提唱しておられるようにさえ見えますし、2000年の沖縄での日本伝道会議のテーマであった「和解の福音」は、戦争の世紀だった「20世紀を終える希望の福音」であったという同部門の応答者の指摘も、「それぞれの時代の福音の再確認」が必要であるという考え方のように私には見えるのですが、浅学非才な私の誤解でしょうか?

2. 「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」の発見

私は、聖書の神の福音は「どの時代にも福音である福音」であると考えています。それは、神の永遠のご計画で「私たちを御子と同じ姿に完成する救いの福音」です。今から45年前、当時神学生であった私は、ローマ人への手紙のギリシャ語原典を一章から、一節一節積義して、読んでいました。恵みにより信仰を通して義とされること、神との平和が与えられていること、キリストとの霊的な合一と献身、聖霊によって神のみ言葉を実行することができること等々を祈りながら理解し、何とか自分のものにし、8章半ばで、聖霊を受けたキリスト者は神の子どもとされているが、あきらめずに、たかぶらずに、うめきながら、神の子どもとして完成される希望を持って歩み続けているという、「健全なキリスト者」の姿の中に自分を見出しました。そして、28-30節を天から私の心の中に注がれる愛の光の中で読んだ時、私は、ここまでパウロが教えていた全てのことの究極的な目標が、罪人の私が「御子のかたちと同じ姿に」されることであり、これこそが、神の救いのご計画なのだというのを悟ったのです。それまで、28

節に「御利益宗教」的な胡散臭さを感じていましたが、「益」が、7章後半で「善」と訳されている語と同じであることを知った私は、神は、私を「御子と同じ姿に」するご計画に従って、私が経験する全ての出来事と私が会おう全ての人々によって、私を、私にとって最「善」、すなわち御子と同じ姿に造り変えて下さると確信したのです。その頃私は、毎朝、神学校の校舎の屋上で個人礼拝を献げていましたので、天を仰ぎ、私を、神と人と敵も愛された御子、主イエスと同じ姿に完成して下さる父なる神を、喜びと感謝の涙を流しながら、大声で、「お父さん」と呼んだのです。これが私の「屋上の経験」です。

その後ドイツに留学した私は、神学校で再度ローマ人への手紙を学び直し、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」こそ聖書の福音で、「どの時代にも福音である福音」であるという確信を持つに至りました。今から丁度40年前、私は、この福音を日本に住む全ての人に宣べ伝えていこうと決意して帰国し、今日迄、この福音を「私の福音」(II テモテ 2:8)として語り続けています。20年程前に信仰入門書として書いた「キリスト教、ここが聞きたい Q & A 21」の中心テーマもこの福音です。20年間奉仕した教会の送別会で、教会員の一人が、「先生は20年間、キリストに似た者になろうというメッセージしかされませんでしたね」と、私にとっては一番嬉しい送ることばを語ってくださいました。

3. 「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」を伝える戦い

今日迄の40年間の日本の教会での伝道者また牧師としての奉仕は、私にとって、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」を伝え続け、この福音に相応しく歩み続けるキリスト者を育成するための戦いでした。

a 「ご利益宗教」との戦い

日本人は現世利益を求める傾向が強く、日本にある大半の宗教が御利益宗教的であるとさえ言われていますが、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」は、そういう日本人に、「自分のための神＝偶像：十戒の第2戒」からの祝福を求める信仰と、自分の幸せのために生きる生き方を捨てさせ、神と人を愛して、全ての人々と神の恵みを分かち合う、御子、主イエスに似た者へと造り変えられていくことを求める信仰と、神の栄光を現すために生きる生き方を選びとらせます。私は、この福音こそ、神とともに生きていない人々に、個々の罪の悔い改めではなく、人生の生き方を180度変える、真の「神に対する悔い改め」と、「私たちの主イエスに対する信仰の従順」をもたらすと確信しています(使徒 20:21、ローマ 1:5)。しかし、私が福音を伝えてきた人々の多くは、精神的にも物質的にも豊かな人生、生きがいのある人生、幸せな家庭等のこの世の祝福を求める人々でした。私は、こういう「人々のニードを満たす福音」を語りませんでした。全ての人を愛しておられる神が、世の人にもある程度与えられるこの世限りの一時的な祝福＝「神の一般の恵み」より、キリストを通してだけ与えられる永遠の祝福＝「神の特別な恵み」を求めるように教え、さらに、主に見習って、パウロのように、「受けるよりも与えるほうが幸いです(使徒 20:35)」と言える主の弟子になりましようかと勧めてきました。

b 「律法主義」との戦い

日本の福音派は、敬虔主義(とピューリタニズム)の影響を強く受けていると言われていますが、神のみ言葉に従うことを強く求める福音派の教会の説教は、しばしば律法主義的になる危険性があることを、私は受洗後すぐに経験しました。私が洗礼を受けた教会は、敬虔主義の流れの中にある、ドイツの教団から派遣された宣教師たちの働きによって生まれた教団に属していましたので、礼拝と安息日厳守、毎日ディボーションの徹底、十分の一献金、教会奉仕、禁酒禁煙、禁トランプ!等々の、敬虔なキリスト者として実行するのが当たり前の義務を教えられた私は、他の教会員より熱心にこれらの義務を果たすうちに、自分の行ないを誇り他の信

者を見下すキリスト教パリサイ派の信者になり、さらに3K（固い、きつい、暗い）クリスチャンになってしまいました。私は、多くの日本人には、宗教によって救われるためには、信者になって、その宗教の教えをしっかりと守らなければならないと考える傾向があり、人間としても、倫理的道徳的な生き方を励まなければならないと考える傾向があるために、聖書の教えと神のみ言葉を守り行わなければ、神の祝福を受けることができないという律法主義に陥り易いと考えています。聖書のみ言葉に従う聖なる者となること（聖化）を強く求める福音は、主の十字架の恵みによって罪の重荷を取り去られた信者たちに、律法の重荷を負わせる事になりはしないでしょうか？

十年程前からほぼ毎年、私は、主イエスが、「彼らは言うことは言うが、実行しない」と非難された律法学者のように、自分が実行しようとしていないみ言葉を教え、み言葉を実行することの難しさに悩んでいる信者を責める説教をする若い牧師たちが、奉仕教会で起こす「事件」を見聞きするようになりました。たしかに主イエスは、「わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」と弟子たちに命じられましたが（マタイ 28:20）、この命令は、牧師たちが信者たちにみ言葉を「教える」だけではなく、信者たちが主のみ言葉を「守る」ことができるように「教え」なければならないという命令です。そのためには、み言葉を教える者が、み言葉を実行することの難しさを経験し、主の導きと聖霊の助けによって少しずつみ言葉を守ることができるようにならなければなりません。福音派の中に、パリサイ派の牧師が増えていかないことを祈るばかりです。

「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」は、日本人を、キリスト教パリサイ派の律法主義から解放します。なぜなら、神の子どもとされた私たちは、子どもが成長するに従って、理解できることと実行できることが増えていくように、み言葉の理解において少しずつ成長し、実行できるみ言葉が少しずつ増していった、やがて「ついに・・・完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」からです（エペソ 4:13）。また、この福音は、最も大事な命令である、「心を尽くして、思いを尽くして、知性を尽くして、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」と、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」の二つの律法を、完全に実行させた主イエス＝「神と人を愛する最も幸いな者」へ私たちを成長させてくださる、人知をはるかに越えた驚くべき愛の福音です（マルコ 12:30-31、エペソ 3:19）。

c 「安価な恵み」と「ありのままの愛」との戦い

新約聖書の教会には、「罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれ」るなら、「恵みが増し加わるために、罪の中にとどま（っていよう）」という信者が少なからずいたようですが（ローマ 5:20、6:1）、自分をみ言葉を行えない弱い者とあきらめ、どんな罪も赦してくださる「安価な恵み」に安住しようとする現代の福音派教会の信者たちを、弱い者を強くし、聖霊によって「栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変え（II コリント 3:18）」られる「高価な恵み」を受けられるように、励まし続けています。またある時期に、「自分をありのままに受容してくださる神の愛」だけを喜ぶ人たちが増えたことがありましたが、神の子どもとされた私たちを育成してくださる父なる神の愛を知らない人々には、「ありのままの私たちを受け入れて、人間のあるべき姿であるキリストに似た神の子どもへ造り変えてくださる父なる神の愛」を伝えなければなりません。

d 「聖霊派？」との戦い？

病気や癒し等の奇跡やしるしを求める人々には、私たち弱く愚かで罪深い者が、神と人と敵も愛する主イエスに似た者に造り変えられる、「キリストにある再創造（II コリント 5:17）」こそ、三位一体の神の最大の愛の奇跡であると教えてきました。聖霊の賜物を強調する人々には、賜物は、「私たちがみな、キリストの満ち満ちた身たけにまで達し、あらゆる点において

成長し、かしらなるキリストに達する」ために与えられている（エペソ 4:13-15）ことを示し、聖霊のお働きの中心は、私たちが新しく生まれ変わらせて神の子どもとさせていただきますり、御子、主イエスに似た者へ成長させていただきますことである（II コリント 3:17-18）と教え、他の人たちよりも「優れた？」聖霊の賜物を与えられている人々には思い上がらないように戒め（ローマ 12:3）、聖霊の賜物よりも、聖霊の実である愛を追い求め（ガラテヤ 5:22 の「実」は単数形で私は愛であると理解しています。I コリント 13:1-2, 14:1）、人知をはるかに越えた驚くべき愛の実を豊かに結んで、愛の神の栄光を現わされた御子、主イエスに似た者へ成長するように勧め、さらに、聖霊を誉め讃える人々（私は「聖霊派」と呼んだこともあります）には、「御霊はわたしの栄光を現します」という御子、主イエスのみ言葉（ヨハネ 16:14）を伝えてきました。

e 「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」の再確認

「私たちが、神と人を愛する御子、主イエスと同じ姿に完成される」という神の救いは、人格的な救いであり、愛の神の完全な愛と救いです。私が主の弟子となった 50 年前から多くの福音派の教会で伝え続けられている、「神、罪、救い」の福音は、罪の赦しという「祝福」と義と認められるという「評価の変化」という祝福を与え、ローザンヌ運動の中で提唱されている「全人的福音」や「包括的福音」は、「霊と心と体に与えられる全人的な祝福」と「社会的、経済的、文化的等あらゆる側面に与えられる包括的な祝福」を与える福音であると一愚かな私の理解不足かもしれませんが一私は理解しています。しかし、私にとっては、これらの福音が与える祝福は、「世と悪の支配の中で死んでいく、弱く愚かで罪深く、信仰と希望と愛のなかった私自身＝私の人格を、父なる神が愛をもって、聖霊によって再創造し、世と悪と死に対する圧倒的な勝利者で、父なる神の御心に完全に従って全てのものと人を愛された救い主であり、愛に満ち溢れておられる御子、栄光の主イエスと同じ姿に完成して下さる」という、愛の神の完全な愛の救いに比べれば、外的で部分的で一時的な救いに思え、歌い踊るほどの喜びを与える「福音」ではありません。

そもそも、罪の赦しや義認の祝福は、私が救われ、新生して神の子どもとされるために絶対必要な恵みですが、私が見習うようにと命じられている御子、主イエスは、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」と言われた父なる神から（マタイ 3:17）、全人的祝福も包括的祝福も与えられなかった、神の苦難のしもべです。御子は、却って、貧しくなられ（II コリント 8:9）、罪とされ（II コリント 5:21）、自分を卑しくし、十字架の死にまで従われ（ピリピ 2:8）、多くの苦しみを通して全うされた救いの創始者（ヘブル 2:10）、苦しみを受けて、それから栄光に入られた救い主で（ルカ 24:26）、これら全てのことを、「父（なる神）がわたしを愛された」からと感謝された神の独り子で、弟子（私）たちに、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」と命じられる、私たちの主です（マタイ 16:24）。このようなお方こそ、パウロが見習っていた御子、主イエスなのです。

使徒パウロは、「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとおもっています。・・・私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることを知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。・・・私は、自分はずでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。・・・兄弟姉妹たち。私を見ならう者になってください。・・・キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだ

と同じ姿に変えてくださるのです」と私たちに勧め、御子、主イエスと同じ姿に完成される希望を与えています（ピリピ 3：8、10-11、13-14、17、21）。

f 全世界の全ての民族、特に日本人への福音

「神の御子、主イエスと同じ姿に変えられる救いの福音」は、全世界の全ての民族、また全ての人にとって「喜びの知らせ」になると確信していますが、特に、多くの日本人にとって「心躍る喜びの知らせ」になると確信しています。私は、牧師としての40年間の伝道と牧会の奉仕の中で、「信仰義認の福音」を十分に自分のものにするのに困難を感じる日本人が多いのに対して、「御子、主イエスに似た者になる」ことを目標として、主とともに生きる歩みを喜んで始める日本人が少なからずいることを見てきました。御利益を与えてくれる宗教を熱心に信じたり、真理（教え）を学んで実行することで救われると考えている日本人が多い一方で、「完全な永遠の愛」を求める心と、「高潔で崇高な人格」に対する憧れを持っていて、いわゆる人格者を敬い、自分を人格的に完成することによって救われる（これは御子、主イエスと同じ姿に変えられていく福音とは逆行していますが）と考えている日本人も、たくさんいることを私は知りました。

日本の独特な文化と言ってもよいでしょうが、師匠に弟子入りし、師匠に見習う（真似をする）ことで成長して師匠のレベルへ到達する、「〇〇道」を極めるために自分の一生を費やして（献身して）も良いという価値観が、日本人の心と生活の中に深く根付いています。魚釣りが上手い人を「師匠」と呼ぶこともあれば、「仏道」という言葉もあり、「神道」は最初から「教え」ではなく「道」です。主イエスは、「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです」と教えておられ（マタイ 7：14）、初代教会時代、ナザレ派の教えは「この道」と呼ばれていました（使徒の働き 9：2 等 6 回）。「私が THE 道であり、THE 真理であり、THE いのちなのです」と宣言される主イエス・キリスト（ヨハネ 14：6）に弟子入りし、唯一の「真の教師」である主イエスに見習って成長し、キリストの身たけに到達する「キリスト道」へ入門する人は決して少なくはありません。私は、「キリスト道福音派」の兄弟子として、師匠に見習う点で後に続く弟子たちの模範となって、この道を歩み続けていきたいと願っています。

g 「ステパノを御子、主イエスと同じ姿に完成させた神」を誉め讃えましょう

「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」を伝える戦いを、40年間続けて来ても、今の私はまだ、パウロのように、「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください」とはとても言えません（I コリント 11：1）。しかし、小さい者の福音を聴いて受け入れた多くの主にある兄弟姉妹たちが、パウロを見習い、御子、主イエスに見習い歩みをしていることを知っている私は、主の弟子となった一人ひとりに、み言葉と聖霊によって働いてくださって、御子、主イエスに似た者へ成長したいという志を立てさせてくださり、それを実現してくださる神に讃美と感謝を献げています。私は、「私の福音」を宣べ伝える時、主に見習う者になっておそらく数年しか経っていなかったにもかかわらず、自分を石で打ち殺す人々のために、十字架の主イエスと同じ祈りを祈り（使徒 7：59—60、ルカ 23：34、46）、神の右の座から立ち上がっておられた主イエスの御腕の中へ迎え入れられた、まさしく、御子、主イエスと同じ姿に完成されたステパノを模範として紹介して、兄弟姉妹を励ましています。私たちを、ステパノのように「御子、主イエスと同じ姿に完成してくださる神」を誉め讃えましょう。

私たち福音派は、第2次世界大戦後70年間、自分たちがこの国の人々に伝えてきた福音を、神のみ言葉によって再検証する必要があるのではないのでしょうか？

B 「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」に関係する主な聖句

関係している聖句は多数ありますが、直接的に関係する聖句を選びました。

1. 旧約聖書の主な聖句と関連する新約聖書の聖句

a 神のかたち

「神は人をご自身のかたちとして創造された。」(創世記 1:27) — 「神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められた」(ローマ 8:29)、「真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」(エペソ 4:24)

b 神と神の民が親子関係にあること (主と主の民が夫婦関係にあることは割愛します)

「主はあなたを造った父ではないか。主はあなたを造り上げ、あなたを堅く建てるのではないか。」(申命記 32:6)、「子らはわたしが大きくし、育てた、しかし彼らはわたしに逆らった。」(イザヤ 1:2)、「まことに、あなたはわたしの父です。・・主よ、あなたは、私の父です。」(イザヤ 63:16)、「主よ。今、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの手で造られたのです。」(イザヤ 64:8)、「わたしはイスラエルの父となろう。エフライムはわたしの長子だから。」(エレミヤ 31:9)、「私たちはみな、ただひとりの父を持っているではなしか。」(マラキ 2:10)

c 神の救いは創造

十戒の第4戒で、安息日に礼拝される神は、出エジプト記 20章 11節では、天地創造の神ですが、申命記 5章 15節では、救いの神です。これは、創造主と救済主が同じ神であることだけでなく、神の救いが神の民の創造であることを意味しています。

「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。わたしは主、あなたがたの聖なる者、イスラエルの創造者、あなたがたの王である。」(イザヤ 43:7, 15)

d メシヤの型

旧約聖書には、メシヤ=主イエスに、特定の部分で似た人々がいました。例：祭司メルキゼデク、父に愛された独り子で、生贄として献げられたイサク、地の低い所に下り高く挙げられたヨセフ、預言者=モーセ、イエスの名と同じヨシュア、王=ダビデ等

e 旧約聖書の最後に登場する「新しい契約」

「その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。」(エレミヤ 31:31)、「わたしが彼らから離れず、彼らを幸福にするため、彼らととこしえの契約を結ぶ。わたしは、彼らがわたしから去らないようにわたしに対する恐れを彼らの心に与える。」(エレミヤ 32:40)、「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行わせる。」(エゼキエル 36:26-27)、「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」(ルカ 22:20)、「天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」(マタイ 12:50)、「人は、水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」(ヨハネ 3:5)、「あなたがたが心の霊において新しくされ」(エペソ 4:23)

2. 新約聖書の主な聖句

a 神のご計画（選び、神の子ども）

「神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認められた人々にはさらに（神の子どもとしての？）栄光をお与えになりました。」（ローマ 8：29-30）、
「神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。」（エペソ 1：4-5）、「あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、いのちのこぼをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。」（ピリピ 2：15-16）、「あなたがたが・・贖い出されたのは・・傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」（I ペテロ 1：18-19）、「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることができる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン」（ユダ 1：24-25）。

b 「御子、主イエスに似た者とされる」

「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしに学びなさい。そうすればたましいの安らぎが来ます。」（マタイ 11：29）、「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」（I コリント 11：1）、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさしに、御霊なる主の働きによるのです。」（II コリント 3：18）、「しかし、あなたがたはキリストを、このようには学び（見習い）ませんでした。」（エペソ 4：20）、「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」（ピリピ 3：21）、「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。」（I ペテロ、2：21）、「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」（I ヨハネ 3：2）

*補足：エペソ 1：20-2：6 は、全能の父なる神が、御子、主イエス・キリストになされた（死者の中から復活させ天の座に着かせられた）のと同じことを私たちにしてくださった（霊的な死者をキリストとともに復活させ天の所に座らせてくださった）という意味。2：1 の冒頭は、「（神は）あなたがたも」と訳すべきでしょう。

c 神の救いは再創造

「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ 3：3）、「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」（ローマ 6：4-5）、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（II コリント 5：17）、「大事なものは新しい創造です。」（ガラテヤ 6：15）

d 「苦しみと試練」

「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光に入るはずではなかったのですか。」(ルカ 24:26)、「神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。」(ヘブル 2:10)、「キリストは御子であられたのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、」(ヘブル 5:8-9)、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前におかれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。・『わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。』訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。・肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」(ヘブル 12:2, 5-7, 10-11)、「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」(ヤコブ 1:2-4)、「あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのとときに称賛と栄光と栄誉になることがわかります。」(Iペテロ 1:7) *他に「主のために苦しみ」等の関連聖句があります。

C. 「福音派の福音理解の歴史」の短い私的略解

1. 「信仰義認の福音」

ルターの発見した「信仰義認の福音」は、私たちを、「教会の教え」に盲従する者から、「聖書のみ」に聴き従う者に変えました。しかし、キリスト者が「義人にして同時に罪人」であるという言明は、結果的に、キリスト者を「罪人で有り続ける義人」にしてしまったと言えるのではないのでしょうか。行ないによって完成される信仰を求めるカトリック教会に対して、行いの実を結ぶ信仰を求めたルターが、行いの実を結ばない「信仰を否定した」ヤコブの手紙を「藁の書」と呼んで軽んじたことも、結果的に、「信仰さえあれば義とされる」という、誤った「信仰義認」の理解を拠り所にして、安価な恵みに安住する信者が増えてしまうことになったのではないのでしょうか。ドイツの神学校で、カトリック教会が聖人(聖職者)のための倫理としていた「山上の説教」を、まず第一に、全てのキリスト者に認罪を与える新しい律法と理解したルター派の信者の中に、「山上」の説教は「天上」でしか実行できない倫理で、「地上」で「山上」の説教を実行することは不可能であるとし、主のみ言葉を実行することをあきらめてしまった人々もいたと聞き、ルター派の教会の中から、主のみ言葉を実行することを強く求める「敬虔主義」運動が起こったのは、歴史の必然だったと理解しました。

2. 「敬虔主義」

私の所属する教団は、敬虔主義を信仰のルーツとする、ドイツ自由福音教会から派遣された宣教師の働きによって生まれた群れです。留学中、私は、何度も「そのことについて聖書は何と言っているか?」という、ドイツの教団のモットーの言葉を聞き、神学校の教授たちも牧師たちも、何か検討すべき課題があれば(最近の例:女性牧師)、皆で聖書を学び、議論し、神の

真理の共通理解に立って、教会で教え、み言葉を実践し、教団を運営している姿を見、また、国内伝道と世界宣教に積極的に参与し、複数の病院、老人福祉施設、難民救済施設等を運営する等、17-18 世紀に、ハレでフランケたちが実践した「真の愛の一滴」の働きを続けているのを知って、まさにこの教団は「敬虔な者の集まり」だと実感しました。

ルター派の国教会が、死せる正統主義に陥った時に生まれた敬虔主義は、信仰義認に続く、再生（新生）と聖化を強調する、「(領邦・国) 教会内 (真の信者の小) 教会」運動です。今日でも国教会の中に留まっている敬虔主義の群れもあり、私のドイツの母教団のように国教会から出て自由教会を形成した群れもあります。私は、ドイツから北欧、北米、さらに日本の教会にまで、聖書中心の信仰生活と教会運営という、実に有意義な影響を及ぼしている敬虔主義を高く評価しています。

しかし、私の目に、敬虔主義は、キリスト者の自己完成のための「敬虔なる願望」に見えてしまうのです。キリスト者は、罪を（少なくとも習慣的には）犯さず、み言葉を実行する、聖い者にならなければならないし、なることができるという、敬虔主義者の人生の目標は、その生き方が献身的かつ禁欲的で、尊敬に値するとしても、私には、どこかで、自己目的的になる危うさを含んでいるように思えるのです。ここで私は、「キリスト者はどこまで完全になれるのか」（私は完全にはして頂けないという立場）、「キリスト者にはすでに聖い者になった者とまだ聖い者になっていない者がいるのか」（私はキリスト者を2種類に分けることはできないし、全てのキリスト者は常に聖くされ続けているという立場）、「聖霊のバプテスマがキリスト者を聖い者とするのか」（私は全てのキリスト者が聖霊のバプテスマを受けているという立場）等々の議論を展開するつもりはありません。私は、漸進的聖化論を支持する者ですが、私の聖化論は、私たちが、御子、主イエスと同じ姿に漸進的に造り変えられていくことであり、地上で、私たちが御子、主イエスと同じ姿に完成されることはありません。このような私の聖化論と、ある少数のキリスト者がある時「聖い者」となって、敬虔なキリスト者として完成するという考え方は、相容れません。「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの恵み」の中を歩んでいるキリスト者は、霊的な幼い子どももいれば成人もいますが、みな、聖霊によって日々少しずつ造り変えられ続けているキリスト者で、いつでも父なる神に愛され、喜ばれている神の子どもたちです。

敬虔主義運動以降の「福音派の福音理解の歴史」については、リベラリズムとの戦いの中で、福音主義同盟によって福音主義教会（福音派）の信仰基準が確立されたこと、千年王国前再臨説の影響で、墮落していく世界への教会の最優先の使命を福音伝道とし、「社会的福音」を否定し、社会的責任を果たすことへの熱心さを失っていったこと、ローザンヌ運動の中で伝道と社会的責任を神のミッションと位置付けたこと等を指摘するに止めます。

3. 「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」の教理の短い私略解

a 三位一体の神による救い

「御子、主イエスと同じ姿に完成させる救い」は、三位一体の神による救いです。父なる神が計画を立てられ（ローマ8：28-30等）、神の御子が人となられたイエスを、聖霊によって神と人を愛する神の子どもとして完成され、同じ聖霊によって、私たちが新しく生まれさせて神の子どもとし、御子、主イエスと同じ姿に完成して下さるのです。

b 創造主による再創造の救い

「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」は、再創造の救いです。三位一体の神は、人を神の「かたち」として、神に「似せて」造られました（創世記1：26）、神から離れた人間は、神のかたちを失ってしまいました。しかし、神は、私たちが愛して、キリストにあって、私たちが新しく造って下さいました（II コリント5：17）（再創造）。新しく造られた私たち

「新しい人は、造り主のかたちに似せられて」おり（コロサイ 3:10）、神は、私たちを、聖霊によって、「神のかたちであるキリスト」（II コリント 4:4）、「見えない神のかたち」である（コロサイ 1:15）、「御子のかたちと同じ姿に」（ローマ 8:29）、また、「主と同じかたちに姿を変え」てくださいます（II コリント 3:18）。

パウロは、「福音は神の力」であると語っています（ローマ 1:16、I コリント 1:18, 24 等）が、牧師になる前、私は、信仰義認の福音と神の力の結びつきがどうしても理解できませんでした。しかし、私は、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」を得させるのは神の力だけであることを確信したのです。パウロは、「神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせ（た）」と語り、（エペソ 1:19-20）、私たちの祈りを越えてどんなことでもおできになる神が（エペソ 3:20）、その全能のすぐれた偉大な力で私たちに働いてくださると教え、「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり」と語り（ピリピ 3:10）、「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです」と宣言しています（ピリピ 3:21）。

c 聖霊のお働き

「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」における聖霊のお働きは、御子、主イエスの全生涯に亘り、私たちの全生涯に及びます。私は、信仰義認の福音における聖霊のお働きは、あまりにも小さいと考えています。極端な表現をすれば、罪の赦しと義認において、聖霊は、主イエスの十字架の死による罪の贖いと復活による義認の恵み（ローマ 4:25）を、信じる者に適用してくださるお働きしかなさらないようにさえ思えるのです。しかし、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」における聖霊のお働きは、御子の受肉、幼少から 30 歳までの人としての生活、伝道と福祉と教会建設の奉仕、十字架と復活と高举までに亘り、聖霊は、私たちを、主イエスと同じように新しい人に生まれさせ、私たちが、主イエスのように生活し、主イエスのように伝道と福祉と教会建設の奉仕をすることができるようにしてくださり、十字架と復活の主と一つとしてくださって、栄光の神の御子、主イエスと同じ姿に完成してくださるといふ、偉大なお働きをされます。

d 教会

私は、「信仰義認を福音」は、信者を、自分が信じて義とされ、天国へ入れていただければそれで良いと考える、個人主義者にしてしまいかねない危うさを含んでいると思います。日本人の中には、教会に行かなくても、家で聖書を読んで祈り、聖書の教えに従って生きていれば、自分はクリスチャンだと思っている「隠れクリスチャン」が少なからずいますし、教会に集っている信者の中にも、自分の信仰と希望と愛を成長させるためには積極的でも、教会を建て上げていくための奉仕には消極的な人々がいるように思います。

「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」は、一人ひとりの信者が御子、主イエスと同じ姿に造り変えられていく恵みだけではなく、一つひとつの教会が御子、主イエスと同じ姿に建て上げられて行く恵みです（エペソ 4:11-16 等）。エペソ 1:23 は、第 2 の「ヨハネ 3:16」と言うべきみ言葉で、私はこの聖句を、「神は、実に、そのひとり子を再びお与えになったほどに、教会を愛されました。それは、全ての教会が、愛の実を豊かに結んで、永遠の愛の神の栄光を現すためである」と私訳しています。愛の神は、実に、その独り子をお与えになったほどに、私たち罪人を愛されました。それは御子、主イエスを信じる私たちが、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためでした（ヨハネ 3:16）。しかし、神は、御子、主イエスを

死者の中から復活させ、ご自分の右の座に着かせ、全てのものを支配する者とされ、その「いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えに」なったのです！。王の王、主の主である主イエス・キリストは、「いっさいのものをいっさいのものによって満たす方」です（エペソ 1:23）。全世界の支配者で全てのものを満たすことができる主イエス・キリストが、かしらとして与えられる教会は、主イエス・キリストのからだとして、主イエスと同じように、神を礼拝し、福音を宣べ伝え、聖書を学んでみ言葉を実行し、全ての人々と神の全ての恵みを分かち合う教会へ建て上げられて、神の栄光を現すことができるのです。

また教会は、神の家族として、兄弟姉妹である信者たちが互いに愛し合い、豊かな愛の実を結ぶことによって、愛の神の栄光を現さなければなりません。御子、主イエスは、ご自分を、神の戒め（最も大切な戒め＝神と隣人を愛する戒め）を全て守ることができるようにしてください。父なる神の愛で、私たち弟子を愛して、神の全ての戒めを守ることができるようにしてください。そして、教会の主イエスは、主の愛と同じ愛で、私たちも互いに愛し合い、神の全ての戒めを守ることができる主イエスに似た者へ、互いに助け合い、励まし合い、育て合うことを求めておられるのです（ヨハネ 15:9-12）。私たちは、全ての聖徒とともに、神の愛の広さ、長さ、高さ、深さを知り、人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神ご自身の満ち満ちたさまにまで満たされて、永遠の神の愛の国のモデルとなって、愛の神の栄光を現しましょう（エペソ 3:18-19）。

e 救い

大胆に言うことが許されるなら、御子、主イエスと同じ姿に完成された人だけが永遠に救われると言えるでしょう。主イエスを、自分を天国へ入れてくださる救い主と信じるだけで、主と信じて従わず、受洗しても自分のしたい事をするだけ、神の御心には従いたくないという人が救われないということは、誰もが認めることでしょう。罪赦されて義と認められるだけでなく、御子、主イエスのように、神に信頼して従い、神と人とを愛すること等、神のみ言葉を実行しようとする人しか、御子、主イエスと同じ姿に完成されないのではないのでしょうか。もちろん、聖書が、「神はあらかじめ定めた人々をさらに召して、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」と明言しているように（ローマ 8:30）、罪赦されて義と認められ他人々は、すでに栄光が与えられたと語られるほど確かに救われて、永遠の神の子どもの栄光を受けることができると私は理解します。しかし、パウロが、異端に惑わされて、「福音の恵みから締め出」されそうになったガラテヤ教会の信者のために、「私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています」と語っているように（ガラテヤ 4:19）、私たち教会は、主イエスを救い主と信じ、主として従う決心をする人々に、信仰生活のスタート時点で、御子、主イエスと同じ姿に完成されるという、クリスチャン人生の究極的ゴールをはっきり示して、パウロのように、目標をみざして一心に走るように励ますべきではないのでしょうか。

第2章 「聖書信仰」の再確認

今日の福音派が第二にすべきことは、「聖書信仰」の再確認であると、私は思います。

A. 「神の啓示の十全性と御子と同じ姿に変えてくださる聖霊による主への信従」

1. 「神の啓示の十全性」

私は、聖書信仰に立つ福音派の教会の牧師として、聖書の十全靈感を信じておりますが、私が今ここで再確認したいことは、「聖書のみで十全である」ということです。

a 聖書のみが神の十全な啓示

旧新約 66 巻の聖書を教会に与えられた神は、私たち 21 世紀の教会に、聖書の追加や補足等として新しい啓示を与えてはられません。神の、1 世紀にはなかった数え切れないほど多くの課題と問題に取り囲まれている私たちに、「あなたがたにとっても、聖書だけがわたしのことばで、数多くの課題と問題に直面しているあなたがたにとっても、聖書だけで十分かつ完全に、全ての課題と問題を正しく理解し、それらに対する取り組み方を知って実行することができる」と語っておられると、私は確信しています。これが私にとって、実際上「聖書が、十全靈感を受けた神のみ言葉であり、私たちに對する十全な神の御心の啓示である」ということです。

b 聖書から全てを十全に学ぶ

40 年以上前、神学校で、「神の啓示は、旧新約聖書 66 巻において完結していて、聖書以外に神の言葉はない」と教えられた私は、「聖書のみ」の教会奉仕者になることを決心し、神学生時代に、聖書全巻を読むと同時に、聖書を正しく理解するために、1 巻ものの福音的な聖書注解書と聖書辞典と神学辞典等を全部読みました。牧師として教会の奉仕を始めてからは、何でもその事柄に対する神の御心が十全に分からない時は、少なくとも新約聖書全体を読んで、その事柄に対する神のみ言葉からの指針を与えられ、そのみ言葉に自ら信従しつつ、教会で教えてきました。例えば、「愛」という言葉が含まれている旧新約の聖句は全て読んで、聖書の愛について 1 年間、毎週教えました。他に、聖書全体から学んだことは、神と主と聖霊の御名とお働き、十字架、復活、高举、教会、教会奉仕（者）、教会政治、礼拝、讚美、み言葉、祈り、義、恵み、聖、罪、選び、救い、いのち、生命倫理、死、葬儀、結婚、離婚、家庭、不妊治療、子ども、教育、献げもの、永遠等々で、とてもここで全ての項目を挙げることはできません。

私は、聖書以外の人間の言葉は、誰の言葉であっても、聖書のみ言葉に照らして吟味し、それが聖書的であれば、「参考」にしてきましたが、決して、神のみ言葉以上に重視しないように心がけてきました。「聖書のみが神のみ言葉である」と信じている聖書信仰者は、あらゆる人の言葉、教え、著作等が、聖書的かどうか見分けて、教会の歩みと働き等のために「参考」にするかどうかを決めなければなりません。福音派の中で、「有名」な神学者や「成功」した牧師等の著作が、時々、聖書より重んじられているように見えるのは、高齢者になった私の目が、ヤコブのようにかすんでいるからでしょうか？

c 聖書から十全な指針を伝える

「真理の柱また土台」である教会には（I テモテ 3 : 15）、いつの時代にも、神のことばであり真理である主イエスご自身と、主が御父のみ言葉として信従しておられた「聖書」の真理を学び直して、その時代への神のみ言葉を語っていく使命があります。私たち福音派の教会は、今の時代に生きる人々と今の世界に対して、その一人ひとりと世界が持っているあらゆる教理的また倫理的な課題と問題に対する神からの指針を、聖書から与えられて、それを伝え、教える使命を果たしているか、自問自答すべきではないでしょうか。

2. 「聖書信仰」の実践—祈り

聖書からの指針を与えられても、それを実行できなければ讚美と愛と義の実は結べません。しかし、そもそも「聖書信仰」に立つ福音派の私たちは、聖書のみ言葉を実行しているのでしょうか？「聖書信仰」の実践の第一歩として「み言葉を祈る」ことを考えてみましょう。

a 「聖書信仰」の実践の一例：「主の祈り」

福音派のほとんどの教団と教会が、「聖書は誤りのない神のみ言葉であり、信仰と生活と教えの唯一絶対の基準である」という信仰告白をしていると思いますが、例えば、福音派の教会に集う人々の中で、主イエスが、「祈りなさい」と命じられた「主の祈り」を、毎日祈っている人は、決して多くないのではと、私は危惧しています。どころが、驚くべきことに、福音書には、

主の十字架死以前に「弟子たちは祈っていた」という記述がないのです。弟子になってすぐ、彼らは主から「主の祈り」を祈るように命じられていたにもかかわらず(マタイ 6:9)、それから2年以上経ってから、「主よ。私たちにも祈りを教えてください」と主イエスに願っています。主は、再度「主の祈り」を祈るように命じられました(ルカ 11:1-2)。そうなのです。私たち主の弟子が、毎日必ず祈るべき祈りは、「主の祈り」なのです。ゲッセマネでも、主が、「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい」と命じられたにもかかわらず、彼らは祈らず眠ってしまいました(マルコ 14:38)。もし彼らが「私たちを試みに会わせないで、悪い者からお救いください」と祈っていたら、捕えられた主イエスを見捨てて逃げるようなことはなかったのではないかと、私は考えています。自分の意志の強さと信仰心と主への小さな愛に頼って、祈らなかったペテロは、主イエスを三度否定した後、聖霊の知恵と力と愛によって、主から与えられた使命を果たすために祈りに専念しました(使徒 1:14)。

もちろん私は、毎日「主の祈り」を祈っていますが、私は、「主の祈り」を祈るのが、御子、主イエスに似た者へ成長させていただくために、何よりもまず第一になすべきことである—マタイ 6:33の主のみ言葉に従うことでもある—と確信しています。天の父なる神に愛されている神の子どもとして、他の神の子どもたちとともに、何よりもまず第一に、父なる神の「御名があがめられ」るように祈って、神の栄光を現わすために生き、神の「御国=神が支配される場所=教会」を建て上げるために奉仕し、父なる神の「みこころ」に喜んで従い、全ての人に「日ごとの糧」が与えられるようにほねおって働いて、神の恵みを多くの人々と分かち合い、自分が神から赦して頂いたように、自分に「負い目のある人たち」を赦し、自分の罪を神に悔い改めて赦して頂くように、人々を、憐れみ深い神に罪を悔い改めて赦して頂くように導き、「試み=試練と誘惑」に、圧倒的な勝利者である主によって勝利し、日々悪魔の働きかけから救ってくださるように、毎日、この全ての祈りを実行するようになるまで祈って生きる人は、必ず、この祈りを祈り、全ての祈りを実行された「御子、主イエスに似た者へ成長」させて頂くことができるのです。

「主の祈り」の中には、三位一体の神がおられ、天と地で永遠に崇められています。また、この祈りは、罪の赦し、義認、新生、聖化、信仰と希望と愛の成長、試練と誘惑、悪魔との戦い、兄弟姉妹愛、隣人愛と敵への愛、世界宣教、教会生活と教会建設、社会的責任、終末、栄化、永遠の神に国等々、三位一体の神から与えられる驚くべき恵みの全てと、聖書の中心的なメッセージが全て含まれています。

私は、聖書信仰に立つ、福音派の教会に、礼拝式で「主の祈り」を祈るとともに、信者の方々に、毎日「主の祈り」を祈るように奨励して下さるように、心からお勧めします。また、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」に相応しく歩むことを願っている(ピリピ 1:27等)、「聖書信仰」者に、心からお勧めします。主イエスとともに、日々「主の祈り」を祈り、聖霊に満たされ、「主の祈り」を一つずつ、少しずつ実行し、御子、主イエスに似た者へ成長させて頂きましょう。

b 「聖書信仰」の実践の一例：牧会の祈り=使徒たちの祈り

使徒ペテロは、「私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします」と宣言しています(使徒 6:4)。私は、牧師になってから40年間、このペテロの宣言に従って、奉仕教会の信者たちとその家族、求道者や地域の人々等のために執り成しの祈りを教会の主へ献げる奉仕を続けてきました。その際私は、使徒パウロに見習って、祈りの覚え書(エペソ 1:16の言語の意味)=全員の祈りのノートを作り、一人ひとりのための祈祷課題と主の祈りの答えを書いて、毎週、集中祈祷日を決めて祈ってきました。40年の牧師としての奉仕の中で作成した祈りのノートは数百ページになります。小さい者を憐れんで、本当に多くの祈りに答えて、主にあって愛する人々に恵みのみわざを行ってくださった、教会の主イエスの御名を心から誉め讃

えます。

私が「牧会の祈り」で祈ってきたのは、「主の祈り」、ヨハネの福音書 17 章の主イエスの「大祭司の祈り」と「使徒たちの祈り」等です。クリスチャンになってすぐ、私は、神が必ず聞いてくださる「神のみこころにかなう願い」（I ヨハネ 5：14）は、自分が思ったり考えたりする願いではなく、み言葉を祈る祈りに違いないと確信して、「主の祈り」の他に、詩篇を朗読して自分の祈りとして献げたり、み言葉を祈るようにしていましたから、牧師になって、教会に集う人々のために執り成しの祈りを献げるなら、聖書の中の主イエスの祈りと使徒たちの執り成しの祈りを献げるべきだと考えたのです。それにしても、主の大祭司の祈りと使徒たちの執り成しの祈りの広さ、長さ、高さ、深さは、人知をはるかに越えています。信者たちのために、パウロは、「神を知るための知恵と啓示の御霊」が与えられ、「聖徒の受け継ぐものがどのようにに栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを」知ることができるように祈り（エペソ 1：17-19）、「その（神の愛の）広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなた方が満たされますように」等と祈っています！（エペソ 3：18-19/他にエペソ 6：23-24、ピリピ 1：9-11、コロサイ 1：10-12、I テサロニケ 3：112-13 と 5：23 等）、私が祈っているパウロの祈り以外の祈りには、「永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、イエス・キリストにより、御前にみこころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行うことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。」や（ヘブル 13：20-21）、「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。」（ユダ 1：24-25）等があります。

人は、自分が熱心に祈っている願いをかなえるために精一杯努力します。大勢の人が教会に集うように熱心に祈っている牧師は、多くの人を教会に集めるために最大限の努力をしましょう。信者たちの信仰と希望と愛の成長を祈る牧師は、私たちがどんな時にも信頼でき、失望に終わらない希望を与えてくださる、人知をはるかに越えた愛に満ちあふれておられる三位一体の神を証しするでしょう。全ての教会に集う人々が「御子、主イエスに似た者」に造り変えられるように祈っている私は、主に見習う歩みを続け、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」を宣べ伝え続けています。

「聖書信仰者」である私たちは、全ての教会に集う人々が、神のみ言葉を実行できるようになるために、聖書の中の祈りを、執り成しの祈りとして献げようではありませんか。

c 「聖書信仰」の実践一例：国と世界のための祈り

神学校で礼拝学を教えている私は、年に数回、他教団の教会の礼拝式に参加しますが、カトリックやオーソドックス、ルーテルや聖公会の教会等のように、毎主日の礼拝式で、「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝をささげる（I テモテ 2：1）、福音派の教会は、決して多くないように思います。牧師であったテモテに「（この祈りが奉仕教会で）ささげられるようにしなさい」と命じたパウロは、「それは、私たちが敬虔に、威厳をもって、平安に静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」と続けています（I テモテ 2：2-4）。国と世界の指導者たちのための祈りは、この国と世界の人々の救いを願っておられる、

私たちの救い主である神の福音を、この国と世界に住む人々に宣べ伝え、一人でも多くの失われた人々が救われるようになるための祈りです。

また、私たちは、この国と世界の指導者が、主イエスが、「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい」と言われた通り、税金を集めて、国民と世界の人々の福祉のために用いているか、神のものである人間の不可侵の生命と基本的人権を守る政治を行っているかを見定めながら（ルカ 20：25）、この国と世界に住む人々が救われ、真理を知るようになることを祈り続けなければなりません。私自身は、三浦光世・綾子夫妻も加盟しておられた小さなクリスチャンの政治連盟に創立時から参加し、已むに已まれぬ時にはデモに参加したり、最近では首相の靖国神社参拝違憲訴訟の賛同人に名を連ねたりしながら、この国の十人に一人が救われるように、この国の指導者たちが、神を恐れ、国民を愛する政治を行うように、また、世界の人々の救いと世界平和のために祈っています。

「聖書信仰者」である私たちは、奉仕教会を、主イエスが言われたように、「すべての民の祈りの家」とし、大祭司である主イエスに見習って、神のみ言葉が祈るように命じている祈りを献げる、祭司の群れとして建て上げていかなければなりません。

B 「聖書信仰」と神学教育

1. 「聖書信仰」の実践—聖書を神学校の教科書に

「日本福音主義神学会」の規約の第三条（立場）は、「本会は聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つ」で、「日本福音同盟」の規約の第三条（信仰基準）の第1項は、「聖書はすべて誤りなき神のみことばであり、信仰と生活の唯一の基準である」です。

私は30年に亘り福音主義に立つ超教派の神学校で、教師また運営委員として神学教育に携わってきましたが、私の神学校での奉仕のモットーは、「聖書に学び聖書に従う」です。私自身が神学生だった40年前には、聖書を教科書にしてはいけないと教師たちから注意されていました。それはおそらく、神学生が聖書を参考文献の一冊のようになってしまうと、神のみ言葉として聴き従わなくなる危険性があると教師たちが考えたからでしょう。私も、聖書を参考にしてはならないと思いますが、聖書はディボーションや説教の時だけに聴く神のみ言葉ではないとも考えています。私は、聖書に学び聖書に従って、主と教会に仕えてきた者として、聖書を最も重要な教科書として学ぶ必要があると信じて、実践しています。

a 「聖書信仰」の実践—証し—聖書に学ぶ

名古屋市の金山にあります東海聖書神学塾で、私は創塾時から、教える教師がいない課目を担当する教務主任として、10課目以上のクラスで教えてきましたが、私は、自分が担当するクラスでは、どのクラスでも、必ず聖書から学ぶようにしています。聖書の概論や緒論、聖書の各書研究等は、当然聖書を学ぶのですが、例えば、「基礎カウンセリング」のクラスでは、最初に、神と主イエスのカウンセリング、旧約の神の民の指導者や新約の教会の指導者（使徒たち等）のカウンセリング、また、新約聖書の教会の信者同士の相互のカウンセリングを学び、牧師になる塾生たちには、信者たちを主イエスとともに歩めるように導くカウンセリングをするように教えています。さらにまた、ヨブ記や詩篇等から、悩みと苦しみの中にある人の心と、主の人知を越えた愛によるお取り扱い等について教えられた多くのことを、塾生たちと分かち合っています。「地域教会形成論」のテキストは、「教会の福音書」と呼ばれているマタイの福音書です。マタイには、礼拝、福音伝道、教会員の教育（例：山上の説教、結婚と家庭に関する教え、終末の預言等）、交わりと福祉、教会奉仕者の姿勢と奉仕内容に関する教え、戒規等々、教会形成に必要な不可欠で基本的なことが全てあります。「倫理学」のクラスでは、今日の倫理的問題を理解するために比較的多くの参考文献を用いますが、学びの中心は「十戒」で、十戒の一つひとつの戒めに関連のある多くの聖句を倫理的に考察しています。「教会役員論」の100

ページ程あるテキストの三分の一は、聖句だけのページです。「牧会学」で「牧会書簡」を学んでいることは、言うまでもありません。牧師の召命を受けた塾生たちとテモテの手紙を学んでいると、今まで毎回、多くの有益な示唆と教訓を与えられます。教会の牧会と建て上げについては、新約聖書の多様な教会観や、聖霊に満たされていた初代教会の歴史を学ぶことなしには、偏った理想像や誤った現実主義しか語れないでしょう。私は、まだ、「説教学」を教えたことはありませんが、もし教えることになったら、「山上の説教」をはじめとする主イエスの一連の偉大な説教、使徒たちの聖書的説教、壮大なモーセの説教、預言者たちの「主のみ言葉」の説教等を、塾生たちといっしょに分析したいと願っています。

b 「聖書信仰」の実践—提案：神学校の教科書

私は、福音書は、主の弟子たちが、主イエスが校長であった、世界最初の神学校で見聞き、学んだことを伝えている書物で、使徒の働きと書簡は、使徒たちが、主イエスの命令に従い、主に見習って伝道牧会の奉仕をしていった記録と、奉仕の中で経験した教会の主のお働きを与えられた知恵と知識の証しであると理解しています。そういう訳で、私は、聖書こそが神学教育における最良で最重要の教科書であると確信しているのです。現在、日本の福音派の神学校では、おそらく大半の教科において、著名な神学者や教師等が執筆した教科書や参考書が使われていると思いますが、私たちは、聖書を、最良で最重要の教科書として学ぶ必要があるのではないのでしょうか。そうすれば、聖書は決して絶版になりませんから、神学校で使う参考書がなかなか手に入らないということはあっても、教科書が手に入らないということはありませんし、全てのことを聖書に学ぶ教育を受けた教会奉仕者（牧師等）たちが、奉仕教会で、信者とともに聖書を学び、神のみ言葉を、教会員と教会の「足のともしび、道の光」として歩めるようになるにちがひありません。

2. 「聖書信仰」の実践—主イエスに見習う教会奉仕

a 「聖書信仰」の実践—証し—主イエスに見習う教会奉仕

私が、奉仕している東海聖書神学塾の塾生たちに、何よりもまず第一に勧めていることは、私自身がいつも心がけていることですが、パウロのように、主イエスを見習う教会奉仕者になるということです。聖書を教科書にしていない神学校を卒業した私は、牧師になってから、奉仕に必要なことを全て聖書から学び直さなければなりません。私が証しすべき三位一体の神はどういうお方なのか、私が宣べ伝えるべき福音はどういう福音か、主イエスと弟子たちは、誰に、どういうふうに伝道し、どんな苦勞と戦いを経験しながら教会を建て上げていったのか等の問いの答えを見つけるために、何度繰り返して聖書を読んだことでしょうか。そして、私は、主イエスと主に見習ったパウロに見習って、例えば、主の弟子となった人には、山上の説教からクリスチャン人生の高い目標を指し示し、信者たちのカウンセリングを始めました。信者になったばかりの弟子たちに、洗礼を授けさせることは（ヨハネ4：2）見習えませんでした。教会員になって間もない人たちの中から成長できると思われる信者たちを選び、教会役員として育て始めて、15年後に長老役員として任職しました。このような、聖書に学び、聖書に従う教会奉仕を続けていく中で、私は、聖書を神学校の担当課目の教科書として教えることができるようになったのです。

b 「聖書信仰」の実践—祈り—主イエスに見習う教会奉仕者の育成

私の教会でのニックネームはペンギン牧師です。私は、日本では、牧師が、ペンギンのように絶滅危惧種なので、ぜひ、「収穫の主に、収穫のための働き手を送ってくださるように」、私と一緒に祈ってくださいと教会員にお願いしています。この10年間程、牧師への召命を受けて神学校に入っていく青年が減っている一方、燃え尽きてしまう牧師、うつ病になって奉仕がで

きなくなる牧師や牧師夫人、セクハラやパワハラ等で辞める牧師等が増加していると言われて
います。私も、何度か、牧師を辞めなければならぬと悩んだことがありましたが、いつも主
イエスが慰め励ましてくださって、定年退職するまでに、2つの教会で長期間奉仕し、5つの教
会で短期間奉仕させて頂くことができました。例えば、何年も教会から離れていた信者が自殺
した時は、マタイ 27:5 から、主は、私の奉仕教会の信者、今なら会計担当役員が自殺した牧
師として、私を慰めてくださり、二度と自殺者を出さない、教会員を愛する奉仕をするよう
に戒めて、牧師として再任命してくださいました。また、カリスマ運動が盛んな頃、6名の教
会員が、「この教会には聖霊のお働きがなく、先生は聖霊に満たされていないと思うので、聖
霊が力強く働いておられる教会に行きます」と宣告して去っていった時、ヨハネ 6:66 から、
主は、多くの教会員が離れ去って行った牧師として、私を慰めてくださり、いつも聖霊に
満たされ、み言葉に従って奉仕をするように戒めてくださり、神の人を愛して、熱心に
伝道と牧会の奉仕をすることができるようにしてくださいました。

あの愚かで弱く、不信仰で不従順な弟子たちを愛して、忍耐強く教導し、主から信託され
た使命を果たすことができる教会奉仕者を育て上げてくださった主イエスは、私たちも必
ず主イエスに見習う教会奉仕者へ育成してくださいます。主イエスを、神と人を愛する
神のしもべとして助け導き、神から信託された全ての使命を全て完全に果たすことが
できるようにされた聖霊が、「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」に
生き、主イエスに見習う教会奉仕者として、主と主の教会に仕える私たちを、必
ず、主から信託された使命を果たすことができる者としてくださいます。

キリスト教団等のいわゆる主流派の諸教団全体では、無牧の教会が 300 以上あると聞
いたことがあります。福音派の諸教団全体でも、かなりの無牧教会があると思われま
す。今の福音派にとっては、聖書に学び、聖書に従い、主イエスに見習う教会奉仕者
を育成することが、目の下の急務ではないでしょうか？

聖書を書いた人々に靈感を与え、誤りのない神のみ言葉を書かせてくださり、聖書に
聴く人々に照明を与えて、神のみ言葉を理解して受け入れ、実行することができるよ
うにしてください。聖霊は、私たちを、必ず御子、主イエスに似た者、また、主
イエスに見習う教会奉仕者へと成長させてくださいます。聖書のみを誤りのない
神のみ言葉と信じ、聖書に立ち、聖書に従って行く福音主義教会で奉仕する者
として、宗教改革 500 周年が近づいている今、私たち、一人ひとり、「真の聖書
信仰者」また「真の福音主義者」であるかどうか、自問自答する必要があるの
ではないでしょうか。

第3章 今日課題と「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」

A 「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」と被造物（自然とほぼ同義使用）

1. 「御子と被造物」

- a 万物は、御子によって、御子のために造られ、御子にあつて成り立っています
- b 「全地に満ちて」

2. 「御子、主イエスと同じ姿に完成される救い」と被造物

- a 「被造物を従わせ、（支配する）」
- b 「被造物を従わせ、（支配する）」—虚無に服している被造物
- c 「被造物を（従わせ、）支配する」
- d 「被造物を（従わせ、）支配する」—被造物のための自然科学を！
- e 「被造物を（従わせ、）支配する」—被造物への福音と被造物の贖い
- f 「被造物を（従わせ、）支配する」—関係する主な聖句
- g 「被造物を（従わせ、）支配する」—うめいている被造物

B 「伝道と社会的責任」と「御子、主イエスと同じ姿に完成される救いの福音」

1. 「愛の戒め」と「伝道と社会的責任」
2. 「主イエスとともに」

(東海聖書神学塾塾長)

部会報の紙面の枚数の関係から、3章以下は項目名を挙げることに留めて、内容は割愛させて頂きました。

